

# 歴文クラブ29年2月研修会

お水取り発祥の寺観菩提寺正月堂を訪ね、  
伊賀上野城と松尾芭蕉ゆかりの地を巡る。

1、実施日 平成29年3月1日（水）雨天決行

## 2、集合

近鉄大和西大寺駅南口 出発8：30（マイクロバス27人乗り）

## 3、行程スケジュール

西大寺（8：30発）－島ヶ原（9：15着）－鶺鴒宮神社（9：30～10：00）  
－観菩提寺（10：10～10：50）－伊賀上野城（11：15～12：00）－  
伊賀上野公園（昼食）（12：15～12：45）－俳聖殿（13：00）－芭蕉翁記念館  
（13：10～13：45）－芭蕉翁生家（14：00～14：15）－鍵屋の辻（14：30～  
15：15）－西大寺南口（16：30着）

## 4、資料

- ①伊賀市島ヶ原 鶺鴒宮神社・観菩提寺正月堂 お水取りの起源
- ②藤堂高虎の足跡と伊賀上野城
- ③俳聖松尾芭蕉の生涯
- ④鍵屋の辻の決闘
- ⑤忍術と伊賀流忍者
- ⑥伊賀上野絵地図
- ⑦参加者名簿

奈良・人と自然の会  
歴史文化クラブ

担当世話人：青木幸子・中井弘・川井秀夫・弓場厚次・古川祐司  
（事務局・連絡先 古川祐司）  
（Tel 0742-44-8621、090-4298-2344）

## 1、観菩提寺（かんぼだいじ）

三重県伊賀市にある真言宗豊山派の寺院。山号は普門山。本尊は十一面観音菩薩。修正会で知られ「正月堂」の名で親しまれている。

江戸時代中期の縁起によれば、奈良時代の天平年間（752年）実忠によって開かれ、平安時代になって中興されたと伝えられるが、創建年代等の詳細については不詳である。

重要文化財（国指定）

本堂、楼門、

木造十一面観音立像（33年に一度ご開帳される秘仏で2015年御開帳）

三重県指定有形文化財

木造聖観音立像

木造多聞天立像

木造広目天立像

三重県指定無形民俗文化財

修正会

## 2、観菩提寺の修正会（しゅしょうえ）

天平勝宝4年(752)の創始以来、1260年以上の歴史を持つ正月堂の修正会は、奈良東大寺二月堂のお水取りに先駆けて厳修される厄除け大餅会(だいひょうえ)式です。

まず鶉宮神社の神主二人が正月堂に入り、神主による修祓(しゅぼつ)(お祓い)のあと法要が始まる。読経や護摩祈とうの後、荒行といわれる『達陀行法(だつたんぎょうほう)』が行われる。燃える松明を振りかざす「火天」役と水をまく「水天」役の練行衆が競演する姿は豪快そのものです。毎年正月十日（現在は2月11～12日）に本尊十一面観音像の前で修正会を行うので「正月堂」と呼ばれるようになった。

正月堂観菩提寺由緒によると、「普門山観菩提寺は、古号広国寺と云。聖武天皇の勅願所、実忠和尚の創建する所なり。本堂正月堂十一面観世音は、実忠和尚、城州、笠置山の竜穴において生人の観世音菩薩を拝し・・・」と笠置寺の龍穴に入った模様が書かれている。

お水取りの起源は、東大寺縁起・笠置寺縁起とともに同じ内容になっている。

注「笠置寺縁起」

第四十六代孝謙天皇天平勝宝三年辛卯十月、実忠和尚、笠置寺の龍穴入・・・・、天平勝宝四年正月一日、実忠が笠置寺正月堂において「二七昼夜六時之行法」を初めて勤修し、また翌二月一日、東大寺二月堂（羅索院）でもこの行法を始めた

いう。

これは東大寺二月堂「修二会」の十一面観音悔過法の起源と説かれたもので、天平勝宝4年（752）始行説は「東大寺要録」「二月堂縁起」「東大寺雑修録」にもみえている。

### 3、鵜宮神社

創立由来は、天平勝宝3年(751)、奈良東大寺の実忠和尚が開創された島ヶ原村内にある正月堂との関係が深く、東大寺二月堂の鵜宮社を正月堂の東南に勧請したものという。

御祭神：事代主命

配祀：大那牟遲命 神倭磐余彦命 菅原道真 木花咲夜比賣命

合祀：市杵嶋姫命 建速須佐之男命 天照大神 豊宇氣大神建御名方神 大物主神 大山祇神  
品陀和氣神 少那比古神 稻倉魂命

(注) 明治39年8月政府は「神社寺院仏堂合祀令」を公布して、合祀を勧奨したため島ヶ原の鵜宮神社には多くの神々が合祀されている。

### 4、お水取り

#### ①お水取りの起源

東大寺開山良弁僧正の高弟、実忠和尚が創始されたと言われる。  
実忠和尚が、ある時笠置山で修行中に、龍穴という奥深い洞窟を見つけ、奥へ入っていくと、そこは弥勒菩薩の住む兜率天に通じており、天人らが生身（しょうじん）の十一面観音を中心に悔過（けか）の行法を行っていた。実忠はこの行法を人間界に持ち帰りたいと願い、当時、東大寺の荘園であった笠置山付近、伊賀・島ヶ原など木津川流域の多くの地に、伽藍を整備し、観音堂を建立し、十一面観音を祀り、そこで行われていた行法を人間界に伝えたのがお水取りであるという。

#### ②東大寺の修二会（しゅにえ）

修二会の正式名称は「十一面悔過（じゅういちめんけか）」と言い、始まりは天平勝宝4年（752年）。

十一面悔過とは、われわれが日常に犯しているさまざまな過ちを、二月堂の本尊である十一面観世音菩薩の宝前で、懺悔（さんげ）することを意味する。  
この法会は、現在では3月1日より2週間にわたって行われているが、もとは旧暦の2月1日から行われていたので、二月に修する法会という意味をこめて「修二会」と呼ばれ

るようになった。

法要は練行衆（れんぎょうしゅう）と呼ばれる、特に選ばれた 11 名の僧が執り行う。祈願作法の中心は、神名帳（じんみょうちょう）と過去帳の奉読で、それぞれ日本全国の神々の名と、古代以来の東大寺ゆかりの人々の名を読み上げるものである。

クライマックスは火天（かてん）役の練行衆が、長さ 8 メートルもある大松明をかかえて跳びはね、内陣を一周した後、その松明を礼堂に向けて投げ倒し、火の粉を撒き散らす松明加持である。修二会の代名詞となっているお水取りは、3 月 12 日の後夜の時（じ）の途中に行われるもので、二月堂前にある若狭井から香水（こうずい）を汲み上げ、十一面観音に捧げる儀式である。これは伝承では若狭国の遠敷明神（おにゅうみょうじん）が湧き出させた霊水であるとされている。

本尊は大観音（おおかんのん）、小観音（こがんのん）と呼ばれる 2 体の十一面観音像で、どちらも見ることを許されない絶対秘仏である。

## 5、島ヶ原（三重県伊賀市島ヶ原）

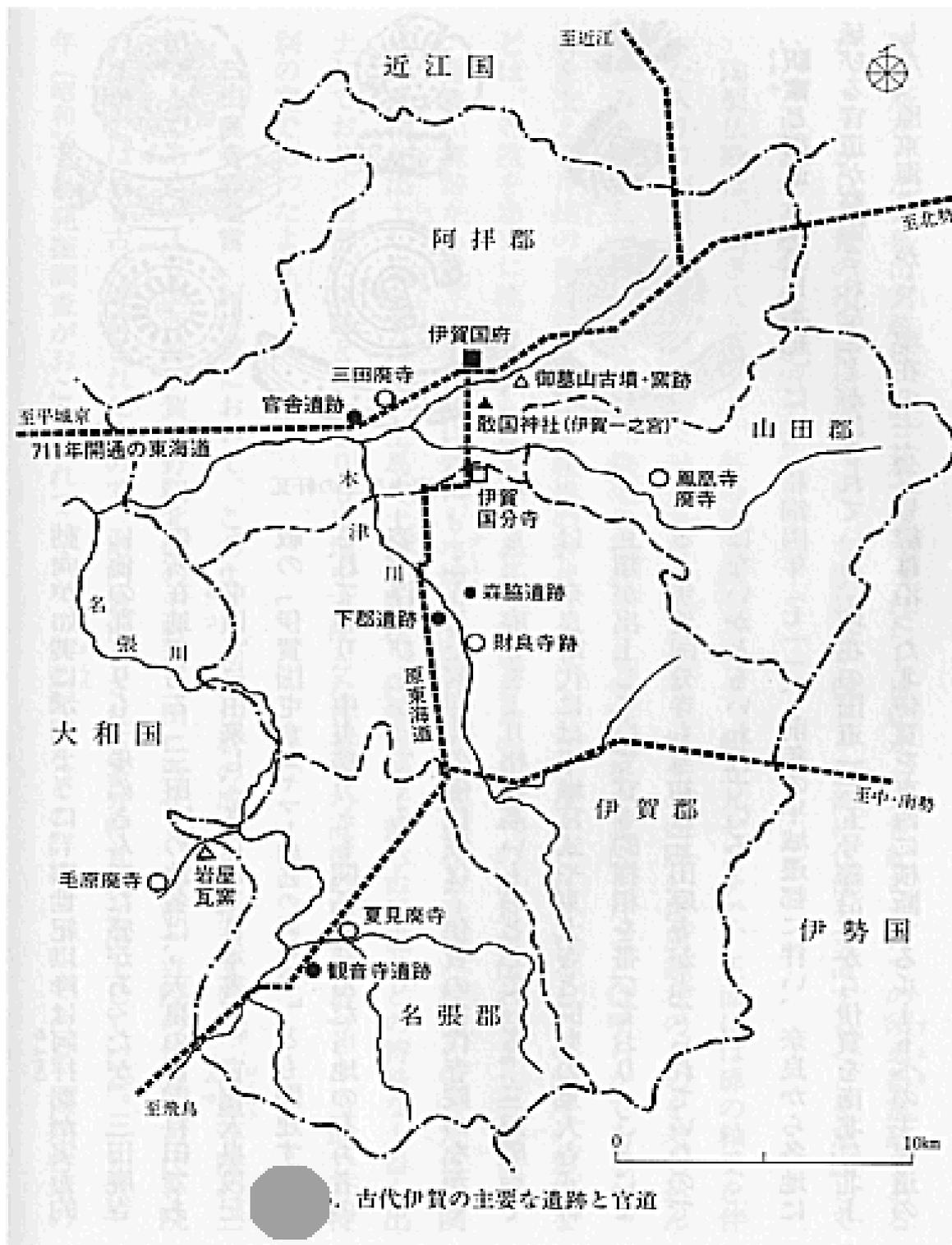
和銅 4 年（711）山城国岡田駅、伊賀国新居駅などが設置され、加茂・笠置・大河原の各村を経て、当地に入り新居村（現伊賀市新居）に出る道が開発されたが、これが旧東海道であった。

島ヶ原宿は山城国から伊賀国へ入る重要な関門であった。それは木津川水運を通じて淀川と更に外洋と繋がり、塩・魚の産地につながると共に、下流の京都・大坂という二大都市にも通じていた。

江戸時代には奈良道（大和街道）の島ヶ原宿として栄えていた。奈良道（大和街道）は東海道関宿の西追分から分かれて加太越で木津川に沿って西進し、島ヶ原・大河原・笠置から奈良を経て生駒連山の暗峠を通過、河内松原に至る幕府の脇往還であった。

（注）大和街道：





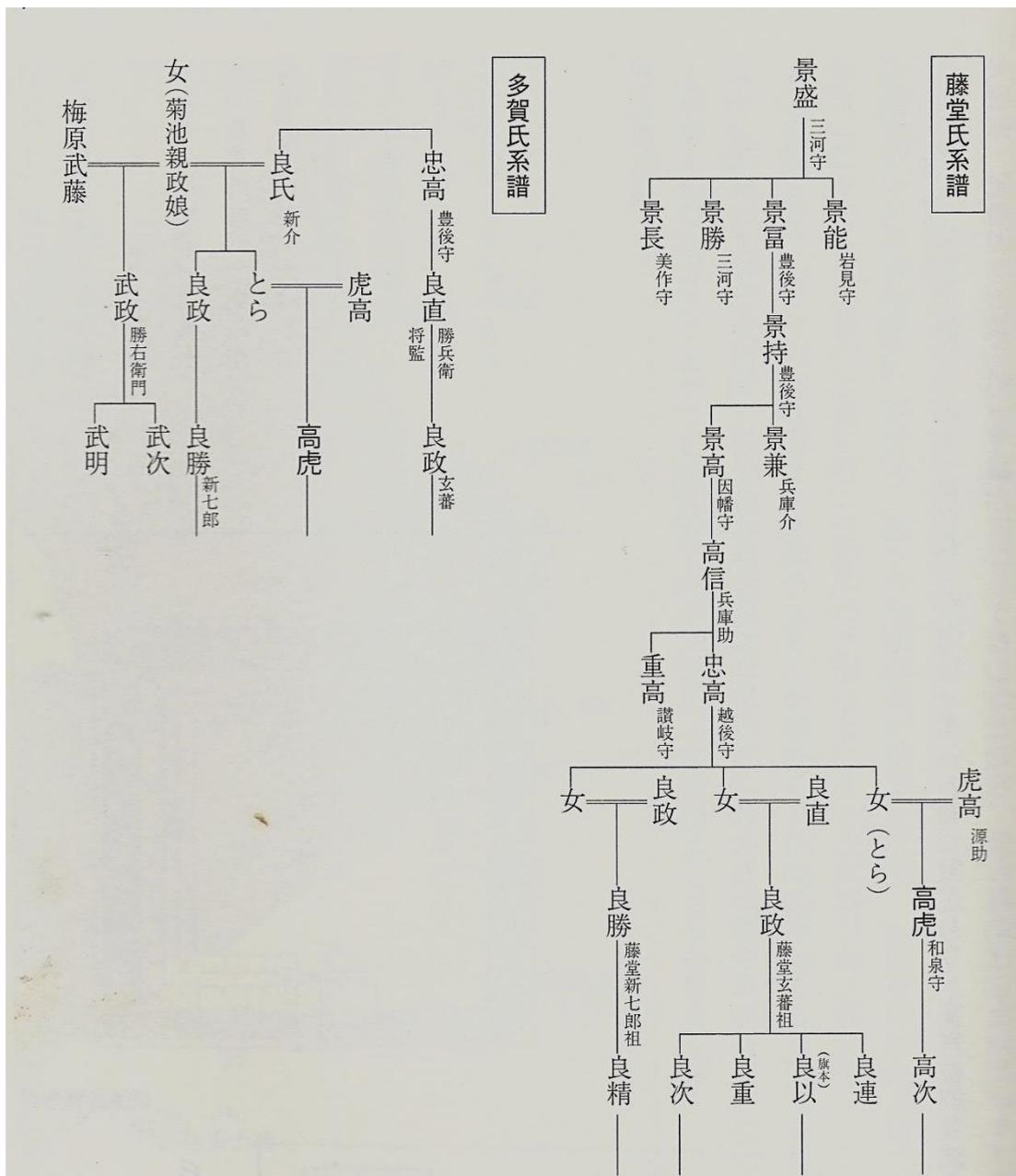
# 藤堂 高虎の足跡と伊賀上野城

(by 川井秀夫)

## 1、出生と家系

1556年 近江国犬上郡藤堂村(現在の甲良町在士)で藤堂源助虎高と妙清夫人(とら)の次男として生まれる。

母「とら」は、藤堂氏の一族である多賀大社の神官・多賀良氏の娘。その後、藤堂忠高の養女となり、同じ養子であった鯉江城主 三井出羽守の次男 虎高に嫁ぐ。藤堂家の家譜によると天武天皇の皇子 舍人親王を祖としている。



## 2、戦歴

高虎は幼名を与吉と言ひ、並外れた体格で乳母の乳では足らず数人の女性の乳を貰う。

13才の頃、兄の源七郎高則よりも背が高く、筋骨逞しい身体であったと言う。

1570年、浅井長政に出仕。父と共に「姉川の合戦」に初陣。武功あり。

1573年、阿閉貞征に出仕。家臣を刺殺したため去る。

1574年、秀吉の麾下、磯野員昌に出仕。佐和山城に入る。

1575年、織田信長の甥、織田信澄が城主となりその家臣となる。武功あるも加増なし。

1577年、羽柴秀長に出仕。禄高300石、与右衛門と号す。長浜城・安土城築城に貢献。この頃、穴太衆に石工の技術を学ぶ。但馬攻め、高松城水攻め、賤ヶ嶽の戦い、紀州征伐に参戦。和歌山城を普請奉行として築城。

更に、四国・九州征伐・小田原攻め・朝鮮の役と野戦の武将として活躍多し。

1592年、秀長没。家督は甥の秀保が継ぎ幼少により高虎が後見人となる。

1595年、秀保没。高虎、厚恩に報い、薙髪し高野山に隠遁。

1596年、秀吉に請われ下山。宇和山城主7万石を拝領する。

1600年、関ヶ原の戦いでは東軍に属し、大阪冬・夏の陣では先鋒の武将として奮戦。

1608年、伊賀・伊勢20万石。伊予2万石の太守となる。

1630年、江戸・柳原邸で死去。享年74才。

## 3、伊賀上野城

当時、築城三名人（加藤清正・黒田官兵衛）と並び称され、築城・社寺仏閣の建立・修復に多大な功績を遺す。東照宮・寛永寺・大阪城・伏見城・駿府城・二条城・竹田城など。

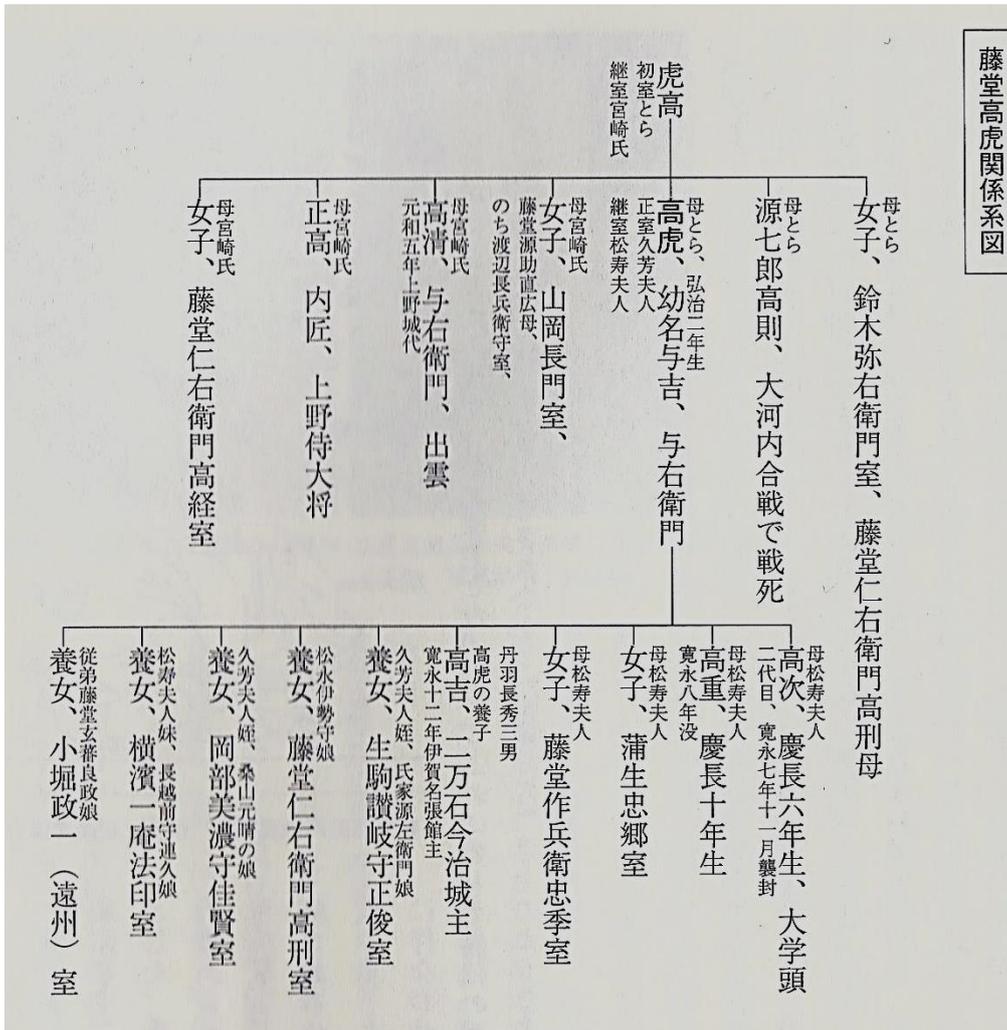
上野城も大阪城を見据えた軍事的な城として、かつて筒井家の居城を改築、高石垣・層塔型の技術を駆使して改築する。

1620年、高虎の弟、高次が城代となる。藤堂家のその後は実子の高次が継承し、養子の高吉が名張藤堂家として分家し代々宮内少輔として重職を務めた。

## 4 余話

世に、主君を七人変えた事から、世渡り上手・ゴマスリ大名と揶揄する評論家が多いが、晩年は卓越した建築・造園の技能を発揮し、家康・秀忠・家光三代に仕えた事は特筆される。また、人生の転機になった豊臣秀長に対する報恩の心にも一途な人間性を感じる。

藤堂高虎関係系図



## 俳聖・松尾芭蕉の生涯 (1644~94)

(by 川井秀夫)

### 1、若き日の芭蕉

古書には、松尾家の本家は藤堂藩の準士分の郷土とあるが、父 与左衛門はその分流で家格はそれほど高くなかった。当時、城下町は身分職業によって居住地域を定めた事から、精密な実測地図によれば、その位置は「農人」と記され、本家の家格から中流農民であったかと思われる。通説によれば芭蕉は幼名：金作と言い2男4女の次男として生まれ、13才の時父を失い家督は兄 半左エ門が継ぐ。

芭蕉は忠右衛門、甚七郎、宗房と名乗り、学問を好む才気ある青年として俳句仲間と、特に侍大将 藤堂新七郎の子息で京の北村季吟に師事して「蟬吟」と号した良忠と接し、出仕の縁を得る。しかし、役柄は良忠の近習でもなく台所御用人程度ではなかったか。

「蟬吟」は25才で病没。出仕に希望を失い、上野を本拠に俳句活動をしていたと思われる。

### 2、奉納と江戸出府

一時、京の北村季吟に師事したが、保守的な貞門俳諧（連歌の時代）がマンネリ化し自由奔放な談林俳諧の新風が巻き起こる。1672年。発句60句を「貝おほひ」と名付け、地元の鎮守 天満宮に奉納し、これが彼の処女選集となる。

「貝おほひ」を懐に江戸で俳諧師として身を立てるべく郷里を出奔。小沢ト尺の邸宅に起居し、水道事業のアルバイトをしながら俳諧修行を読ける。

1675年、大阪から談林派の総帥・西山宗因が東下し、その一座に列し頭角を現し俳諧宗匠として独立。世俗を離れ深川の地に草庵を結び隠棲する。

### 3、庵住と漂泊の旅

庵に植えた芭蕉の繁茂により「芭蕉庵」と呼ばれ、いつか俳号を「芭蕉」と称す。

漢詩文調を導入し、貞門の言語遊戯や談林の享楽主義から抜け出し、人間の生活をうたう俳諧を模索する。最初の選集「虚栗」は蕉風の「天和調」と呼ばれ一時期を画す。

1684年 41才。「野ざらしを心に風のしむ身かな」野辺に白骨と化す覚悟で、東海・近畿・木曾・甲斐を9ヶ月を要し旅に出る。「野ざらし紀行」を遺す。江戸に帰着後、有名な「古池や蛙飛びこむ水の音」を詠む。

1687年、吉野・奈良・須磨明石を巡遊し「笈の小文」を遺す。

1688年、岐阜・木曾路・信州更科を旅する。「更科紀行」である。

1689年、門人 曾良を伴い、多病の身に死を賭した「奥の細道」の  
大行脚に出る。

江戸から岐阜大垣まで二千数百キロ 5ヶ月の旅は世俗の名利や物欲の執着を捨て、魂の自由、清純さを得ようとした芭蕉の生き方に基づくものであった。

1694年、望郷の念にかられ、故郷 伊賀に帰郷。病身をおして大津・京都・大坂に俳席を重ね、(軽み)の俳風を伝える。陰暦10月12日、大坂の旅宿で生涯を閉ず。

絶吟 旅に病んで夢は枯野をかけめぐる すさまじい詩人魂である。



芭蕉(左)と曾良 (燕村(奥の細道画集))

## 鍵屋の辻の決闘・・・(ウィキペディアより抜粋)

(by 古川)

鍵屋の辻の決闘は、寛永 11 年 11 月 7 日 (1634 年) に渡辺数馬と荒木又右衛門が数馬の弟の仇である河合又五郎を伊賀国上野の鍵屋の辻(伊賀市小田町)で討った事件。伊賀越の仇討ちとも言う。曾我兄弟の仇討ちと赤穂浪士の討ち入りに並ぶ日本三大仇討ちの一つ。

### 1、経緯

寛永 7 年 (1630 年) 7 月 11 日、岡山藩主池田忠雄が寵愛する小姓の渡辺源太夫に藩士・河合又五郎が横恋慕し、拒絶された又五郎は逆上して源太夫を殺害した。又五郎は脱藩して江戸へ逐電、旗本の安藤次右衛門正珍にかくまわれた。藩主池田忠雄は幕府に又五郎の引渡しを要求するが、安藤は旗本仲間と結集して拒否、外様大名と旗本の面子をかけた争いに発展する。

寛永 9 年 (1632 年)、池田忠雄は疱瘡のため急死したが、又五郎を討つよう遺言する。幕府は、池田家の因幡国鳥取へ国替えを命じ、旗本たちの謹慎と又五郎の江戸追放を決定する。喧嘩両成敗として事件の幕引きをねらった。

源太夫の兄・渡辺数馬は仇討ちをせざるをえない立場に追い込まれた。戦国時代よりの仇討ちの習いとしては兄が弟の、父祖が子孫の、主君が配下の仇を討つことは異例なことであったが、主君忠雄の遺言による上意討ちの内意を含んでいた。数馬は仇討ちのために脱藩、剣術が未熟な数馬は姉婿の大和郡山藩剣術指南役荒木又右衛門に助太刀を依頼する。

### 2、決闘神屋の辻

数馬と又右衛門は又五郎の行方を捜し回り、寛永 11 年 (1634 年) 11 月に又五郎が奈良の旧郡山藩士の屋敷に潜伏していることを突き止める。又五郎は再び江戸へ逃れようとする。数馬と又右衛門は又五郎が伊賀路を通り、江戸へ向かうことを知り、道中の鍵屋の辻で待ち伏せする。又五郎一行は又五郎の叔父で元郡山藩剣術指南役河合甚左衛門、妹婿で槍の名人の桜井半兵衛などが護衛に付き、総勢 11 人に達した。一方、数馬側は又右衛門それに門弟の岩本孫右衛門、川合武右衛門の 4 人。

11 月 7 日早朝、待ち伏せを知らず、鍵屋の辻を通行する又五郎一行に数馬、又右衛門らが切り込み、決闘が始まる。孫右衛門と武右衛門が馬上の桜井半兵衛と槍持ちに斬りつけ、半兵衛に槍が渡らないようにした。又右衛門は馬上の河合甚左衛門の足を斬り、落馬したところを切り伏せた。次いで、又右衛門は孫右衛門と武右衛門が相手をしていた桜井半兵衛を打ち倒す。頼みとしていた河合甚左衛門、桜井半兵衛が討ち取られたことで、又五郎側の多

くは戦意を喪失し、逃げ出してしまった。逃げ遅れた又五郎は数馬、又右衛門らに取り囲まれた。又五郎を倒すのは数馬の役目で、この二人は剣術に慣れておらず、延々5時間も斬り合い、やっと数馬が又五郎に傷を負わせたところで、又右衛門がとどめを刺した。俗に又右衛門の「36人斬り」と言われるが、実際に又右衛門が斬ったのは2人である。

また、決闘地の領主である津藩藤堂家が又五郎一行の情報を提供したり、兵を密かに配置し、決闘が始まると周囲を封鎖し、又五郎の逃走を阻止するなど、数馬、又右衛門らを支援していたともいわれる。支援の理由はこの事件を外様大名と直参旗本との争いとみなしたためと見られる。

見事本懐を遂げた数馬と又右衛門は世間の耳目を集めた。特に、実質仇討ちを主導した荒木又右衛門は賞賛を浴びた。数馬と又右衛門、孫右衛門は伊賀上野の藤堂家に4年間も預けられ、この間、又右衛門を鳥取藩が引き取るか、旧主の郡山藩が引き取るかで紛糾する。

3人は鳥取藩が引き取ることになり、寛永15年(1638年)8月13日、3人は鳥取に到着するが、その17日後に鳥取藩は又右衛門の死去を公表した。又右衛門の死があまりに突然なため、毒殺説、生存隠匿説など様々な憶測がなされている。

## 《現在の鍵屋の辻》

鍵屋の辻は、伊勢街道と奈良街道の分岐点にあたり、現在は「鍵屋の辻史跡公園」となっている。園内には荒木又右衛門の遺品や錦絵などを展示した伊賀越資料館や数馬茶屋などがある。





## 荒木又右衛門・・・・（ウィキペディアより抜粋）

（by 古川祐司）

荒木 又右衛門（慶長 4 年（1599 年）寛永 15 年 8 月 28 日生まれ（1638 年））は、江戸時代初期の武士、剣客。名は保知、保和とも。鍵屋の辻の決闘での活躍で名高い。

### 1、生涯

慶長 4 年（3 年説もある）、服部平左衛門の次男として伊賀服部郷荒木村で誕生。幼名を丑之助、あるいは巳之助ともいう。

父・平左衛門は、藤堂高虎に仕えたが、淡路で浪人した後、備前岡山藩の池田忠雄に召し抱えられた。平左衛門には渡辺数馬（内蔵助）という同僚がいた。この内蔵助の子に、みの（女）、数馬（二代目）、源太夫があり、のちに又右衛門は「みの」を嫁に迎え、二代目数馬らとは義兄弟の縁となる。

又右衛門は、兄・弥五助が池田家に仕えたこともあり、12 歳のときに本多政朝の家臣・服部平兵衛の養子となった。しかし、元和 8 年（1622 年）、本多家が姫路城主となったあと、28 歳ごろに養家を離れて浪人し、生まれ故郷の伊賀に帰っている。故郷でははじめ菊山姓、のちに荒木姓を名乗った。

剣術は、父から中条流、叔父の山田幸兵衛から神道流を学んだといわれている。一方、15 歳のころ柳生宗矩や柳生三厳の門人となり柳生新陰流を学んだとする説が『柳荒美談』などにある。

その後、大和郡山藩松平忠明に召し抱えられ、剣術師範役 250 石に取り立てられた。

## 2、謎の急死

仇討ち本懐を遂げた後、数馬と又右衛門は藤堂家に客分として保護されたが、鳥取藩主・池田光仲の請いにより、寛永15年（1638年）8月12日に鳥取に移った。

2人はそれぞれ妻子を呼び寄せたが、又右衛門の妻子が9月に鳥取に到着したころには、又右衛門は8月28日に頓死したということになっていた。死因については毒殺など諸説ある。墓は鳥取市内の玄忠寺にある。

一説には、5年後の寛永20年（1643年）9月24日に又右衛門は死去し、この間数馬とともに鳥取城内にかくまわれていたとする。これによれば、急死と発表された理由は、河合党による暗殺を恐れて病死をよそおった、あるいは、鳥取藩への移籍話がまとまらないため死んだということにして交渉を打ち切ったものと考えられている。



# 忍術と伊賀流

(b y 中井)

## 1. 忍術の起源

忍術は六世紀末に日本に伝来した「孫子の兵法」に求められる。スパイを使って、敵の戦力を調べる「諜報」と破壊する「謀略」がある。修験道の行者（山伏）が戦いにこれを実際に用いて発展させ、天台・真言の密教を加えて山伏兵法を完成させた。

古来、山伏たちは大和、美濃、鞍馬、根来、伊賀の山々に住んでいた。伊賀・甲賀の地は大名の支配の及びにくい複雑な地形で、甲賀流は飯道山、伊賀流は赤目四十八滝に修験道場があった。

## 2. 武術と忍術

兵法というとき、その中には武術と忍術とが含まれていたが、忍術は間諜、謀略、盗賊、放火、暗殺、格闘、信号術、火術、薬方などを含んだ一種独特の術であった。したがって武士の間には普遍的に広がらず、武蔵・甲斐（信玄の三つ者）・越後（戸隠流）・信濃・伊賀・甲賀・紀州（雑賀衆・根来衆）に発達しただけだった。

## 3. 伊賀流忍術

伊賀・甲賀が特に高度な発達を遂げた。両派はもともと同じ派で、秘伝書「万川集海」も同じくしていた。甲賀忍者が一人の主君に忠義を尽くすのに対し、伊賀忍者は金銭による契約以上の関わりを持たない点であるとされる。伊賀者は平常は農業を行い、行商して各地の情報を探る一方、指令があると戦場やその後方に出向き、工作活動を行った。

伊賀国は平安から室町時代まで東大寺の荘園だったため中央から任命された守護役や地頭は干渉できなかった。そのため伊賀の地侍は武力によって荘園を私物化していった。室町になると伊賀の地侍は修験道の影響を受けて忍びの術を身に着けた。こうして武士団は忍者集団となっていった。彼らを統率したのが、服部半蔵、藤林長門守、百地出羽守で三大上忍と言われた。

## 4. 天正伊賀の乱

戦国時代、伊賀は織田軍から 2 度にわたって攻撃を受ける。天正伊賀の乱である。第一次は織田信雄が勢力拡大のため 1 万の兵で伊賀に侵攻するが、伊賀忍者のゲリラ戦術で敗走する。

2 年後織田信長が 4 万の軍で攻め（第二次天正伊賀の乱）、伊賀全土を焼き払い、大人・子供を問わず徹底的に殺戮した。この戦いで生き残った伊賀者は各地に四散して戦国大名の忍者となり活躍した。

## 5. 神君伊賀越え

本能寺の変の時家康は堺にいた。明智光秀の追跡を逃れて本国三河国に向けて逃避行が始まる。この時伊賀の服部半蔵が 300 人ほどの伊賀忍者を集めて家康を護衛し、無事三河に戻ることが出来た。これが家康の生涯で艱難の第一といわれる「神君伊賀越え」といわれた。この功績によって服部半蔵は 200 人の忍者集団の組頭として家康に仕え、以降江戸城警護の「伊賀百人組」が組織された。半蔵門は服部家の邸宅跡と云われる。

2月歴史文化クラブ研修会  
参加申込者 名簿

	氏名	申込日	備考
No. 1	下村 晴文	2月1日	メール
No. 2	太田 和則	2月2日	ならやまBC
No. 3	川勝 孝雄	2月2日	ならやまBC
No. 4	永井 幸次	2月2日	ならやまBC
No. 5	吉川 利丈	2月2日	ならやまBC
No. 6	鈴木 末一	2月2日	ならやまBC
No. 7	安倍 和生	2月2日	ならやまBC
No. 8	西谷 範子	2月2日	ならやまBC
No. 9	弓場 厚次	2月2日	ならやまBC
No. 10	弓場 京子	2月2日	ならやまBC
No. 11	富井 忠雄	2月2日	ならやまBC
No. 12	竹本 雅昭	2月2日	ならやまBC
No. 13	松尾 弘	2月2日	ならやまBC
No. 14	福田 美伸	2月2日	ならやまBC
No. 15	中川 瑛雄	2月2日	ならやまBC
No. 16	山本 妙子	2月2日	ならやまBC
No. 17	西出 勉	2月2日	ならやまBC
No. 18	羽尻 嵩	2月2日	ならやまBC
No. 19	田矢 恵三	2月2日	ならやまBC
No. 20	池田 信明	2月7日	メール
No. 21	中川 徹	2月10日	メール
No. 22	塩本 勝也	2月10日	メール
No. 23	岸谷 和代	2月10日	メール
No. 24	森 英雄	2月11日	メール
No. 25	川井 秀夫		世話人
No. 26	青木 幸子		世話人
No. 27	中井 弘		世話人
No. 28	古川 祐司		世話人